

LGBTの人々における自己受容の過程について

—心理的支援に役立てるための一考察—

植村 愛佳

(愛媛大学大学院教育学研究科)

1. LGBTとは？

LGBTとは、それぞれの頭文字がL:レズビアン G:ゲイ B:バイセクシュアル T:トランスジェンダーを表す、性指向と性自認に関する性的少数者の総称である。(針間 2016) 一般的に、LGBは生まれ持った体の性別と心の性別が一致していて、恋愛対象が同性、もしくは両性の人。Tは、生まれ持った体の性別と心の性別が一致していない人のことである。

2. 日本における割合と問題

電通ダイバーシティ・ラボの発表によると、日本におけるその割合は5.2% (LGBT調査 2012) から7.6% (LGBT調査 2015) と3年間で2.4%も増加している。これはおそらく最近メディアでLGBTが取り上げられる機会が増え、こうした公の調査にも自分自身の本当のセクシュアリティを回答しやすくなったのだろう。しかし、LGBTという名称が広まり、理解が進んだように見えても当事者の厳しい現実や悩みは尽きない。日高・木村・市川(2007)やゲイ・ジャパンニュース(2014)によると、調査協力したゲイ・バイセクシュアル男性やレズビアン・バイセクシュアル女性、トランスジェンダーの半数以上が自殺を考えたことがあると報告されている。これらのことからセクシュアリティ問わず当事者は自分自身に悩み、「死」を意識しやすくと考えられる。また、当事者ははじめから自分自身をLGBTと自己受容ができる訳ではなく(湧井・サトウ,2003;杉山,2002)、性の認識には流動性もあることが指摘されている(上野,2006;石井,2009)。加えて、日高(2005)によると調査に協力したゲイ・バイセクシュアル男性のうち62.1%が心理カウンセリングを受けることに興味があるが、カウンセリング受診可能な医療機関を知っているのは17.4%にとどまっているという報告がされている。このように心理カウンセリングにつながりたい一方で、そうできない現実があることが窺える。また繋がれたとしても、自分自身を隠すことになっている当事者は、気持ちや悩みを上手く伝えることは難しいと考えられる。

3. 目的

LGBTという名称は広まったが、まだまだその理解は深まっていない。そのため、当事者の自己

受容過程を明らかにし、理解を深めるとともに、心理的支援についても考察する。

4. 方法

対象：LGBT当事者4名(G1名、B1名、T2名)

方法：半構造化面接によるインタビュー調査

インタビュー時間：60分を2～3回

分析方法：IPA(解釈学的現象学的分析)

5. 結果

現在3名のインタビューをとり終え分析を進めている。Gの方は自身のセクシュアリティを自己受容するまでに18年、Bの方は7年、Tの方は即時と、個々で期間の違いが見られた。GとBの方に関しては、初めて好きになった異性が同性の要素を強く持っていることや、当事者との時間を過ごすことで安らぎや自分のセクシュアリティへの肯定感が持てる、自身が性別違和なのではないかと考える等、共通点が見いだされた。Tの方に関しては、自身が一般的に言われるセクシュアリティとは違うことを即時に自己受容しているものの、自身の性の表現方法において2回ほど変わっていることが明らかになった。

6. 考察と課題

各セクシュアリティ、個々人により自己受容するまでの期間に違いはあるものの、おおむね数年はやはり必要であることが予想される。また、自身で行動できる範囲が狭い高校生以前は、自分の中でセクシュアリティについて考え自分と向き合い自己受容を進めている。そして大学生以降で自身に否定感を持ちながらも自身のセクシュアリティに確信も持ちつつ、当事者と実際に接点を持つことで、安心感を得、より大きく自己受容が進んだと考えられる。今後は残り1名の協力者のインタビューをとり終えたとともに、さらに分析を進めていく。当事者による研究のため、当事者ならではの強みも活かしつつ、偏った見方にならないように気をつけて引き続き研究を行っていききたい。